

令和3年度 第4回 尼崎市総合教育会議 議事録

【日 時】 令和4年3月28日（月） 午後1時30分～午後3時15分

【場 所】 尼崎市役所 4-1会議室

【出席者】 尼崎市総合教育会議構成員  
稲村 和美 市長／座長  
白畑 優 教育長  
徳山 育弘 教育委員  
太田垣亘世 教育委員  
中平 了悟 教育委員  
正岡 康子 教育委員

関係者（尼崎市総合教育会議設置要綱第6条）

吹野 順次 副市長  
能島 裕介 理事  
足田 剛志 こども青少年局長  
梅山耕一郎 教育次長  
東 政信 教育次長  
西村 和修 管理部長  
増田 裕一 学校教育部長  
橋本 貴宗 学校教育部次長  
中道 隆広 職員課長  
谷 章 幼稚園・高校企画推進担当課長  
石本 将史 いじめ防止生徒指導担当課長  
高橋 利浩 市立尼崎高等学校長

【事務局】 こども青少年局 こども青少年本部 こども青少年課  
教育委員会事務局 管理部 企画管理課

【資 料】 ・次第  
・資料1 令和3年度子どもの人権アンケートの調査結果について  
・資料2 体罰のない社会を実現するための基本方針・取組方針  
・資料3 市立高等学校いじめ重大事態について  
・資料4 教育委員会体罰根絶アクションプランの取組状況（市尼対象抜粋）  
・資料5 高等学校スクール・ミッション、スクールポリシーの策定について

【次 第】 開 会  
1 令和3年度子どもの人権アンケートの調査結果について  
2 いじめ重大事態について  
3 市立尼崎高等学校の改革について  
4 市立高等学校スクール・ミッションの策定について  
5 その他  
閉 会

【議 事】

(敬称略)

稲村

では、皆さん改めてこんにちは。お疲れ様です。

年度末の忙しい時期になりましたけども、この1年振り返りますと、新しい課題が出てくる一方で、これまで取り組みを始めているものも手応えを得るところまでいけたかというところ、まだまだ道半ばというところが正直なところかなと思っております。しかしながら、教育環境の整備というのは待ったなしですので、ここで改めて課題の整備をして新年度しっかりと歩みを前に進められるような会議になればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

今日は議題が大きく4つございます。1つめは体罰の重大事案を受けまして、毎年実施することと致しました子どもの人権アンケートの調査結果についてです。これはご承知かと思いますが、匿名で学校を通さずに体罰を受けた、目撃した情報を定期的に寄せていただく機会を作ることで、安心につなげていきたいですし、無くしていきたいですけれども、もしそういうことがあれば、迅速な対応していくことを目的にしているものです。2つめは残念ながら新しいじめ重大事態が起きておりますので、その件についての報告をいただきます。3つめは市立尼崎高等学校の改革の進捗確認について、4つめは市尼に限らず、3つの市立高校についてスクールミッションに基づいて、学校主体でスクールポリシーを掲げていくこととなりますが、このスクールミッションの策定についてしっかり確認していきたいと思っております。

1つめの人権アンケートの調査結果については私から報告をさせていただきます。お手元の資料1をご覧ください。趣旨につきましては、先ほど私が説明したとおりです。なお、メール等で体罰通報窓口を、教育委員会だけでなく市長部局のほうでも常時開設をしております、そこに、連絡がありましたら迅速に対応するというようにしておりますが、ここで報告すべき案件は今年度につきましてはございません。重大事案になっているものがございません。アンケートの結果ですが、4分の3ページ、〈3〉の調査対象事案の内容確認結果をご覧くださいければと思います。直接的な暴力と言える体罰、そして性的なことに関すること、直接の暴力とは言えないかもしれないが、言葉遣い又は接し方で心に大きく傷をつけるような人権を侵害するような振る舞いということで、大きく3つに分類をして確認しております。

今回は、体罰を認定されるものが1件ございました。これは4分の4ページが一番上をご覧くださいなのですが、検診の待ち時間中、私語をする児童に対し苛立って、胸ぐらをつかむという事例があったということで、これにつきましては調査対象事案についての対応ということで、アンケートの実施前から学校のほうから報告を受けている案件になっております。当該行為を行った教員については、すでに措置を実施済になっております。苛立ってというところが、いつも課題になるわけですが、先生方も色々忙しい中で負担もあるかもしれませんが、こういったことがないように、引き続き取り組んでいくということになっております。その他、この表をご覧くださいましたら、体罰以外の不適切な行為、言葉遣い等、即処分になるような案件ではないけれども、共有をして再発防止に努めていくべき不適切な内容ということで6件。指導上許容できる範囲内の行為・言葉遣い等という案件が26件。その他ですけれども、今回に限らず体罰を中心に聞いているのですが、いじめに関する情報もアンケートに書かれてあがってくるということもあります。ただ、いじめについては、他にもいじめに関するアンケートが各学校で学期ごとに行われておりまして、それとあわせて対応を進めていくという事にしておりますので、いじめについては別のルートにつなげているということをご理解ください。

なお、小学校・中学校の内訳について、小学校が47件、中学校が7件です。

体罰の認定には至らなかった案件ですが、スマートフォンで写真を撮った、子どもに対して威嚇するような態度を取った案件があがってきております。これについては、研修等々で今後につなげていくことを改めて教育委員会の皆様にもお願いしたいと思います。今回、私が気になっておりますのが、6件中の4件目、特別支援学級に在籍する児童に対する指導ということで、児童のほうも興奮状態にあったということだと思っておりますが、トイレ内に1人で過ごさせ、結局25分ほど扉を開けずに、閉じ込めている状態になったという案件です。体罰認定とかなり際どい、ブラックに近いグレーなのか、グレーで片づけていいのかという印象を強く持ちました。個別の状況で聞かないといけないと思います。この特別支援の児童に対する接し方というのは非常に問題が起きやすいところでもありますので、これについては特段の注意とこの案件だけがどうという訳ではなくて、今の特別支援の実態が適切な状況にあるのかという視点で教育委員会の方でこういった調査結果も受けてチェックしていただいた方がいいのではないかと考えております。私からは以上です。私の問題提起も含めて教育のほうからコメントお願いできればと思います。

白畑 調査対象事案の対応については、事案の発生後学校長からすぐに体罰事案として、教育委員会と意見共有報告したうえで、当該教諭についての訓告措置を行っております。この事案に関しては、措置を行った後に、アンケートが届いております。体罰以外の不適切な行為、言葉遣いについては、6件で教員は5人であり、体罰以外の不適切な行為、掃除の時間中の2件は1人の教員が行ったもので、6件で5人となっています。これらについても教育委員会並びに学校長から厳重注意するとともに、適切な指導方法について助言等を行っております。今後これらの事例を学校現場で共有して、繰り返し起こることの無いよう、再発防止に努めていきたいと考えております。また、体罰以外の言葉遣い等の行為については、トイレ付近で特別支援学級在籍の児童に課題をしなかった理由の説明を求めたが、なかなか理由を述べなかつたため問い詰めた形になり、マスクを掴むような形で、挑みかかってきたので、落ち着かせるためにトイレ内で少し過ごさせたものです。これについては正座、直立、特定の姿勢を長時間に渡って保持させる、といった肉体的苦痛を与える行為ではないため、今回は体罰事案にしなかったというものです。ただ、この事案については、不適切な事案として教育委員会として5回に渡って指導を行っております。

稲村 教育委員の皆さんは、別途報告を受けている。教育委員会の方では、一定やり取りをしているという理解でよろしいですか。特に発言があればいただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

このアンケート自体も極力予防的な取り組みにつなげていこうというところを重視している点もありまして、研修等々でこういった具体事例を共有していただく、グループワークで深めていくとか、もう一步こういったことを材料に取り組みを進めていただけたらと思うのですが、そのあたりはいかがでしょうか。

白畑 体罰など不適切な行為につきましては、事例を活用しながらアンガーマネジメント研修を複数回行っております。

稲村 アンケートの結果、毎年新しい結果出てきますので、そういう意味では研修への反映もタイムリーにいただけたらと思います。また、特別支援の在り方については来年度から支援体制も少し充実を図ることとしておりますが、色々な協議と現状把握から取り組みが必要と考えておりますので、福祉等を持っている市長の側と教育委員会と一緒にやっていくべきことだと思いますし、就学前、小学校中学校と切れ目なく取り組みが進むようにというのも大事な論点だと思っております。来年度、就学前教育の課を独立して進めていく

ことにしておりますが、非常に重要な点だと思っておりますので一緒に頑張っていきたいと思っております。よろしくお願ひします。では、1つめの案件は以上でよろしいでしょうか。続きまして、2つめのいじめ重大事態について進みたいと思ひます。教育委員会の方から報告をお願ひします。

白畑

市立高等学校でのいじめ重大事態の2件について説明します。

まず、説明の前にせつかく市立高校に入学していただきながら、重大事態になる前に学校と教育委員会が連携して取り組んでいかなければならなかったにもかかわらず対応できず、不登校、退学を余儀なくされた生徒や保護者の皆さんには申し訳なく思ひます。

まず、不登校事案につきましては、事案の内容は調査を行っておりますので詳細は省きますが、まず一件目につきましては学校行事をめぐるトラブルであり、事案の経過をここでまとめています。令和3年2月24日に学校が生徒からいじめの相談を受けて、聞き取り等を行っております。経過対応を行ってきた中で4月21日に学校がいじめの相談を受け、いじめの認知をして対応を行ったということです。その後5月7日に学校のほうから市教委に報告を受けております。5月以降学校が対応してきたが、7月の期末テストを受けるなど登校はしていたものの、2学期以降は登校することが出来なくなったということで、8月27日に市教委としていじめ重大事態の不登校事案として判断し、学校主体の調査を開始したということです。9月以降学校は家庭訪問を定期的に行って、生徒Aや保護者と面談や学習課題の受け渡し等を行って、弁護士や臨床心理士等とも相談しながら対応してきたが、12月22日に生徒AがYouTuberの方と共に学校を訪問して、その時の映像や音声が1月19日にYouTubeに配信されたというものです。その後、市教委と生徒と保護者との面談を行う中で、3月22日市教委として第三者委員会に諮問を行い、調査に移行したところですが、2の調査組織については、裏面に調査の主体及び組織ということでまとめておりますが、2の調査主体にあるように、事案の内容によって生命心身財産重大事態ということで退学転学こういった場合は学校または設置者が主体となって、調査を行っていくとなっております。不登校重大事態については、原則学校が主体として調査を行うことになってはいますが、ただ学校主体の調査では十分な結果が得られないと判断した場合は、設置者が調査を実施するということになってはいます。これに基づき、2の調査組織については、不登校重大事態ということで学校主体で調査を行ってりましたが、学校主体調査では、十分な結果が得られないと判断して、3月22日に第三者委員会に調査を移行したものです。

次に、退学事案については、これも一部YouTubeに取り上げられています。記載はありませんが、令和3年2月に同級生同士でトラブルが発生したということで、学校の方で対応してはいましたが、令和3年9月8日に市教委が生徒Bの保護者から連絡を受け、学校に確認を行い、いじめ認知したものです。9月以降学校は生徒Bと保護者との面談や電話連絡を行い解決を図ってきましたが、年が明けて1月17日に生徒Bの保護者から学校が退学願ひを受理したため、市教委はその連絡を受けて翌日に市教委としていじめ重大事態として対応することとしました。その後2月16日に市教委として第三者委員会へ諮問を行い、調査を開始しました。この調査組織につきましては退学ということで、第三者委員会で調査を開始しております。このいじめ重大事態については、2件とも学校と市教委がもっと連携を密にして、早くに対応すべきだったと思ひます。生徒が一番何を求めているのか、もっと寄り添った対応が必要だったのではないかと思ひます。そして、高校ではいじめの認知がまだまだ小中に比べると積極的に認知はされていないので、もっと感度をあげていじ

めの認知を積極的に行うような取り組みをしていかなければと痛感しております。この2件については、第三者委員会の調査について夏頃を目途に調査をお願いしており、その調査報告書を受けて、検証し、再発防止に努めていきたいと考えております。

稲村 どちらの案件も、かなり状況が悪化して第三者委員会の立ち上げってなっていると思います。教育長も少しおっしゃいましたけれども、こうならないように対応していくということを目指していくことが望ましいわけですので、学校側が、何もしなかったというより面談等はしているけれども、結局学校に来られないという状況が解決していない、そして、その生徒自身の納得も得られていないという状況です。高校生ともなると、小学生とは違うと思います。実際この YouTube の中でもこの生徒は、当事者と話し合いがしたいということをして仕切りに言っています。なかなかそういう環境が整っていないと学校側が判断をしていたということだと思いますが、本当にその判断が妥当だったのか、そこを適切な環境に整えるには何が足りなかったのかということ、学校の関係者と教育委員会が自分たちもしっかりと振り返る、第三者委員会の外部からの評価だけを待つだけでなく、自分自身の振り返りも並行して、少し進めていく必要があるのではないかと感じています。正直、外から分からないところもあります。学校には学校の思いや考えがあったと思います。これは絶対これが正解だと誰にも言えない中でしっかりと振り返っていくことが次につながる、そして今この課題を少しでも前進させるという事になると思います。この第三者委員会はいつ頃に結果が出る予定なのでしょうか。

白畑 夏頃を目途に調査をまとめていただくようお願いしています。

稲村 調査というのは、相手のあることですのでスケジュール通りいかない面もあると思いますが、そのくらいのスピード感でやっていただければと思いますし、教育委員会としての振り返りと外部からの第三者委員会からの意見を突き合わせて今後の方針を作っていくというのがいいのではないかと思います。夏を目途に教育委員会としても自分たちが主体となった掘り下げが出来ればいいと思います。総合教育会議で第三者委員会と両方あわせたものを報告いただくのか、また相談させていただきます。今回、私も YouTube の件は、長期の不登校が発生していますという報告以降、次にこのことに触れるのが YouTube の動画でした。色々な手続きや、事情があるものの、スピード感について、ズレがあるということ強く感じる事案だったと思いますので、そういった点も含めて少し検証をしていく必要があると思います。スケジュール感があまり決められてなかったのではと思います。行って面接をし、声をかけるというケアをしていくという事と、一定の事実関係を調査して報告するという事だと思うので、調査に関してはもう少し時間を区切って、結局こういうふうにならないと第三者委員会に移行しないという印象も受けました。また、学校調査についてのスケジュール管理の課題があったのかなという印象を受けました。

白畑 学校の調査がなかなか進まないということで、我々も期限を切って対応しておくべきであったと痛感しています。1月の YouTube 動画が配信されて一定ある程度の期限を決め、調査報告が出てこない場合は第三者委員会に移行することをお知らせ済みで対応すべきでした。

稲村 学校主体の調査を開始したというのは、この不登校事案に関しては8月末から9月なわけですね。結局この YouTube で問題が発信されるまで調査中ということになっているということだと思いますので、このあたりも検証が必要であると思っています。高校生はしっかり自分で考えて、十分に学んでいく真ただ中にある年齢の生徒達だと思います。当然、全部を生徒だけでというわけではないですけども、生徒の主体性をもっとサポート出来るような、例えば

子どもの権利擁護委員会ということで話し合いの場をサポートするような機関も立ち上げています。今回も自分でこの YouTuber のところに投稿して学校に行くという行動を起こしています。このやり方しかなかったのかということではなく私たちに強く突き付けられたのではないかと思います。私たちの持っているメニューについても学校現場にどのくらい浸透出来ていたのかと強く感じましたので、今後につなげていかないといけないと思いました。これはまだ両方これからも調査が続くということですが、夏にしっかりと出来るようにスケジュール組んでもらうように思っております。教育委員から補足や意見があればお願いします。

徳山 僕、一番古参の教育委員なんですが、市長、松本前教育長が何度もいじめ体罰で謝罪している姿を心に刻んでいる。教育委員会の事務局さんも一生懸命対応されているのは見ているのですが、次の課題とも絡みますが、義務教育の小学校と中学校に関しては、教育委員会と学校の連携は、以前と比較すれば、ずいぶん風通しよくなっていると思います。一方、市立高校と教育委員会のこの流れを見ていて、それぞれの市立高校がすごく特徴がある分、学校文化があるので、これまで教育委員会が遠慮していた所がなかったかということのを改めて検証していかないといけないと思います。ただ、それぞれの学校の良さは残すべきだと思うのですが、こと、いじめ、体罰といった人権問題にかかわることにに関しては、これからしっかりと教育委員会でき取り組んでいかないといけないと思います。予算的にも市長がご配慮いただいて、これまで高校と幼稚園の部署が一緒だったところが、僕が教育委員になった時に幼稚園の問題があって、どうして幼稚園がこんなに軽んじられているんだろうと思っていたのですが、同じことが高校にも言えたわけですが、来年度から部署がしっかり分かれて、これからもっと人をさいていただければと思います。この教育委員会と高校との風通しの良さについてはしっかり議論をし、意見を述べていきたいと思っています。他いかがでしょうか。

稲村 中の平 このいじめ重大事態、公開された YouTube についても、教育委員会でも色々発生後に議論いたしました。その中でお話をさせていただいたことは、動画を見た印象としてやはり、一般市民の立場から見て、印象として市あるいは学校の取り組みが不十分だと受け取られる、印象づいてしまう状況は適切ではなかったなということがあります。実際の市長がご指摘になったような対策の動きが十分ではなかったという事もあるかと思うんですが、それに加えて、行っていることについての説明もうまく出来ていなかった。行政内での手続きと教育委員会に関わらせていただいた立場から見れば、あの事を言っているんだな等と、ある程度おっしゃっていることの内容が想定はできましたけれども、経緯や用語を知らない市民として見た時には、それが言い訳に聞こえたりとか具体的な動きにつながっていないという印象を受けるものであったという面もあったかと思います。それについては、そもそもの行政であったり、学校側が自分たちの取り組み・対応をしっかりと説明していく能力というのも今後求められるんじゃないかと思います。それは組織の透明性にも関わっていくことかとおもいます。しっかりと自分たちの動き、仕事を説明していく能力というのは、今後地域と関わっていくということをいろんな部分で必要になってきます。地域や市民と連携していく上でも必要な能力かと思いました。いわゆるアカウンタビリティみたいなものを考えていっていただきたいという話をいたしました。それから、YouTuber の話、ここで具体的にどこまで言うべきかは分からないんですけど、目立っていたのは可罰感情というか処罰感情という部分です。いじめの被害者、当事者には、当然加害者を処罰してほしいという思いがあるだろうと思います。しかし、学校現場の先生方っていうのは教育

的配慮、価値のようなところで、そういった対立する価値、見方のせめぎあいつているのもあったのかなと思うんです。ただ、学校現場の取り組みっていうのは、教育的価値とか教育的アプローチという事を大事にしている。その持っている価値みたいなものを重視して取り組みや、教育を行っているかということ、今後どう地域であったり、市民一般に伝えていくか。それを抜きにしてしまうと、いじめと体罰、体罰はともかくとして、いじめに関しては可罰感情だけで物事を進めていっていいものではないと理解しています。しかし、いずれこのような議論も起こってくるかと思しますので、教育現場、教育機関としてのあるべき姿勢について、そのあたりの方針や価値観の整理はしておいていただきたいと思っております。

太田垣 先ほど市長も教育長も、ここまでなる前には早期の対応が必要だとおっしゃいました。今回は、体罰もそうですけど、いじめのような問題が起きた時に聞いてもらえる場所というのが大切であるのに、そこが弱かったと思うんですね。A君の悲しみとか二次感情になって怒りとなって YouTube というところに持っていかれたわけですが、今後 YouTube や SNS などのツールを使った問題といいますか、そういうものを考えていかなければならないと思うんですね。何十万人という対象に向けて発信したあとなので、いろんなコメントなんかも発信されています。これから学校現場、我々がどういうケアを考えていくかという、その後の対応というものもしっかりと考えていかないといけないと思います。こういうトレンドのツール、こういうところに二次被害が出ないかというのを考えていく中で大切かなと思いました。

正岡 生徒Aさん、生徒Bさん両件とも年度をまたいでのお話ですよ。いじめとか、そもそものなにか行為があったのが前年度で、翌年度にかけて、学校の先生方からもお話を伺ったんですけども、クラス替えのやり方とか、そういう時にもいじめた生徒さんと一緒にならないように配慮をしたが、それでも漏れてしまったところもあってとかいう現場のお声も伺いました。学校現場でも色々考えて取り組んでいらっしゃった、だけど最終的にこういう結果になってしまっているということもあって、難しい問題だなとは思いますが、先ほど市長が言われたように教育委員会側もそういう学校側が、一番近い担任とか学年主任の先生がどういう風に動かれたのかを理解していただいて、教育委員会の動きもどうだったかしっかり見直して、お互いやってきたことの突き合わせといいますか、そういうところから何か解決方法、次に同じことが起こらないようにという協議といいますか、事実の積み重ねをお互いに理解することが出来たらいいなと思っております。

稲村 ありがとうございます。この両案件につきましては、夏までに学校並びに教育委員会として振り返り、そして第三者委員会としての様々な調査等ご指摘をいただくということで、また取り組みが進んでいくと思いますので、その時に課題の整理をしっかりやりたいと思いますが、早く取り入れられる教訓等があれば夏を待たずにしっかりと進めていくということをお願いできればと思います。それでは、この案件につきましてはよろしいでしょうか。それでは、続きまして3つめの案件です。市立尼崎高等学校の改革について、報告をお願いしたいと思います。

高橋 10月11日だったと思うんですけど総合教育会議での意見を受けまして、その後教育委員会と学校と話し合いをもちまして、現在の取り組み状況をまず把握するというのと今後の対応を検討いたしました。その部分を説明させていただきます。とくに時間も限られておりますので、太字を中心に説明させていただきます。まず1ページをご覧ください。真ん中あたりの③の、10月11

日総合教育会議でこのような意見がありました。中学生の入学説明会において、市尼の部活動の方針を理解してもらった上で、市尼を選んでもらう必要があるのではないかと、この中で特に現行の市尼の部活動の方針を配布するだけでなく、きちんと説明してもらいたいということに関しまして、現時点この右側の、3回10月2日、11月3日にオープンハイスクール、9月23日に体育科説明会を実施しております。この中ではカリキュラム改編等の話を口頭で簡潔に説明はしております。来年度、右のところ今後は口頭で説明だけでなく、部活動の方針カリキュラム改編の目的その内容についてはオープンハイスクール、または体育科説明会にて資料に基づいて説明していくというふうになっています。また、入学後の新1年生に対して、部活動の紹介を行う際、特に4月当初生徒会が中心にやっていますが、市尼の部活動の方針をここで資料とともに説明していくという形でいきます。下のところの各部活動の方針ということで、これは議論のまとめの17ページに記載されております。特に部活の方針に盛り込む事項の、一番盛り込む内容としては生徒の活動の自主性を尊重するとありますが、その点につきましては現在右横④部活動の方針につきましては特に17ページに記載されています。部活動の方針①～④はすべてを現在網羅しておりません。現在の取り組み状況としては①～④すべてを網羅しているクラブが運動部で2部、一部網羅しているが文化部13部、運動部14部、一切網羅していない文化部が10部ありました。この状況を踏まえまして右横の今後はこの①～④すべてを盛り込む事項としまして、盛り込んで取り組んでいこうと思っております。実際、4月から新しい部活動がありますので、4月当初に盛り込むような形で指導していきたいと思っております。その下の⑤のところ、特に生徒の主体性が資料等に落とし込まれるようにしてもらいたいということにつきましても、指導の方針や指導の目標というのが各クラブありますが、これにつきましても日々のミーティングや練習を通じまして成長していく生徒の考え方の状況、個々の課題等を踏まえながら顧問が作成しております。今後は、指導の方針や指導の目標を顧問が作成するだけではなく、顧問と生徒が話し合う機会を定期的に設けまして、生徒の意見を反映させるという形で生徒の主体性を伸ばしていく、特に指導方針や指導目標の作成に関われるよう、そういう仕組みも務めていきたいと思っております。

続きまして、裏面のところですが、2ページをご覧ください。議論のまとめ50ページ関連というところで、特に総合教育会議ではS S Wは、どれぐらいの数の事例に関わっており、また、どんな案件があるのかという進捗状況を確認する必要があるのではないかとというご意見に対しまして、現在につきましてはS S Wについては今年度から教育委員会のほうから配置されておまして、大変ありがたく思っております。3月10日時点でS S W関わった案件は20件あります。内容としては、不登校や発達特性、虐待等の学校内だけでは対応が難しい案件につきまして、教職員とのケース会議や本人・保護者との面談などを行っています。その他にもS S Wは月1回開催されるカウンセリング委員会にも出席しまして、ここでいろんなケース会議を行っています。色々などころで関わっていただいて、今すごく有効活用になっていますので、来年度も継続していきたいと思っております。続きまして2ページの一番下の段です。議論のまとめの20ページの関連というところで、特に校長の権限を明瞭に発揮する、学校の管理職の関与がしっかりと及んでいる状態にするように、体制を変革する必要があるが、例えば、報告書等を顧問に提出してもらい、その上で顧問の任命を決めるとか、指導者と顧問が特定の人に偏らないようにするなどの、組織の見直しを考えていかなければならないのではないかとというご意見に対しまして、現在部活動の顧問を委嘱と決めていく場合、校務分掌に入って



おりますが目標設定面談マニュアルに基づき、人事評価に合わせて評価・育成シートの提出や面談を行ったうえで校長が最終的に決定し、職員会議で教職員に周知しています。年間3回面談を行いまして、その結果を踏まえ校長が部活動の顧問の委嘱を行っております。特に部活動顧問については、現在複数の顧問を配置するようにしてございまして、技術指導や生活指導等の役割を分担し共有しながら、特定の人に偏らないように育成しております。今後は特に各クラブの委嘱については校長が書面特に評価・育成シート面談を通して、判断したうえで今後も決定していこうと考えております。

続きまして、3ページのところで校長先生や教頭先生が異動した後も、ある程度明文化すること等により、現在実施している体制が維持できるのではないかという事に関しましては、まだ明文化しておりませんが、来年度部活動顧問の委嘱に関する面談スケジュールにつきまして、校長が最終決定するといったものを、最初の職員会議等で明示しまして書面で周知し、部活動の顧問の委嘱を含めた校務分掌の決定と一緒に明文化していこうと考えております。その下の議論のまとめの23ページ関連というところがありますが、この項目は、学校の管理職が情報を持っていないことが課題であった。特に管理職が巡回を行うこと自体が目的ではないと考えている。何のために巡回しているのか、しっかり押さえてもらいたいという形で今年度、現時点では管理職による巡回は月に2～3回程度実施しております。子どもたちの様子であったり、先生方の指導を見ながら、定期的に部活動の巡回、特に顧問との話については、気付いたことはすぐに部活動顧問との面談を行うようにしている。来年度から巡回の記録を残し、その際に気付いたことは面談記録として残していきたいと思っております。

続きまして、4ページのところは地域に開かれた学校づくりの実施内容というところで、今年度7月以降になりますが、地域との関わり活動を網羅しておりますのでご清覧していただきたいと思っております。こちらは割愛させていただきます。

5ページにつきましては議論のまとめの40・41ページ関連というところで、ここにつきましてもスポーツ総合演習等体育科のカリキュラムを変えておりますので、その実施内容についても時間の都合上ご清覧いただきたいと思っております。

最後の6ページの、議論のまとめ43・44ページ関連というところで、特に43ページに部活動顧問が進路指導に関与することは、一概に否定されるものでもなく、しかしながら、部活動顧問が進路指導に関与していることにより、部活動における顧問と生徒・保護者との主従関係が固定化されることは、生徒の主体的な進路決定の観点からも望ましくないのではないかというご指摘を受けております。現在、その横の部活動の成績不振や人間関係によって、退学や転校を余儀なくされることなく、卒業が出来るようにするためにも、進路指導においては1年時より、担任による夏季休業中の三者面談や保護者を通じて、生徒の希望及び保護者の意向を十分にくみ取った上で、部活動顧問だけでなく、学年担当者および進路指導部と連携しながら進路決定を行っており、また1年時からの進路希望調査や模擬試験時の進路希望調査を通じ、学年全体で生徒の進路希望を把握するとともに、進路講演会等によりキャリア教育を通じて生徒が主体的に進路選択できるようにしております。これも継続していきたいなと思っております。そちらに書いてはおりませんが、今年度国公立が現時点で30名、関関同立100名初めて超えまして、子ども達の頑張りが評価できるんじゃないかなと宣伝させていただきます。

最後の、体罰やいじめ事案があった前後で、進路の状況や指導のあり方にと

のような変化があったのかいうところで、現在1年時より、担任による夏季休業中の三者面談等を通じて生徒、保護者の意向を十分にくみ取った上で学年・進路指導部や、部活動顧問と連携しながら、進路決定に導いております。生徒の希望する進路実現のために、担任や顧問だけではなく、教職員が協力して学力保障であったり・入試形態の選別・個々の入試形態による指導を行っております。時間の都合上、太枠のところだけ説明いたしましたので、今後は来年度もこれを継続してやっていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。以上で報告を終わります。

稲村

はい、ありがとうございます。以前の総合教育会議でも市立尼崎高等学校の改革はまだまだ道半ばでこれからが本番だと確認したと思うのですが、年度末を迎えるにあたって、率直に言って教育委員会事務局と学校現場とコミュニケーションが大幅に改善されないまま進んでしまったのではないかなと感想を持っています。そういう状態で改革が前に進むとは到底思いませんので、もう一度しっかりとリスタートして、というのも次の4つめの議題にも関わりますけれども、スクールミッションを明確に確定し、それに基づいたスクールポリシーを学校の方が策定して進めていく。ある意味大きなチャンスかなと思っております。エースプロジェクトをやっているわけですが、学校の先生方から湧き上がる形でこの方針をまとめる暇がなかったというのが、最初のボタンの掛け違いになったのかなと思っておりますので、取り込もうとしている中身には一切ブレはなくていいと思っておりますけれども、もう一度生徒達も含めて市尼に誇りと愛着を持つ関係者が、「これが市尼のスクールポリシーだ。」と言えるものを言語化するというのも、スクール・ミッションを策定する上で必要があると思っております。やりかけている中身は大きく変更が必要だとは思っていないのですが、そこをしっかりとやっていくということと、そこを改めてやった時に、この取り組みはスピード感もってやらないとだめだ等、もう一段、浸透が図れるという面があると思っておりますので、来年度、尼崎チーム一丸となってしっかり進めていきたいと私自身も気持ちを新たにしております。市尼というのは100年を超える伝統校です。その歴史を誰も否定してないこれまで申し上げてきたところですが、こういった重態事態が発生したことを受けて、膿を出し切るという事を私達は言いました。それについて発信し、新しい方針で頑張っていく市尼という事を理解して入学していただかないといけません。まだ、口頭での説明にとどまったという報告になっておりますので、今後の対応については、資料を用いて説明していこうとなっておりますが、この時に各部活動を引っ張る指導者の方、一人一人が自分の言葉で新しい方針を語れるようにということから逆算してこういった説明会の場でも資料が配布出来たらいいのではないと思っております。こういうこと言うのは、体育科の名称をこのままでいくか変えた方がいいか、カリキュラムが変わっているからどうか、という検討の決着がついてない。名前は体育科でも構わないと思うのですが、そういう議論で学校の先生方にアンケートを実施してくださったと、教育委員会では共有されていますよね。結論はまだ出てないということで、あくまで参考資料として教えていただいたレベルですけれどもやっぱり現場の先生方も中身変わってないのに、名前だけ変えても意味ないのではないかなという感想を書いている方が少なからずいらっしゃいました。学校もまだまだ自分達は変わったとなっていないのを逆に感じたわけです。変えたらダメなところと変わらないといけなところがあるのかしっくり共通認識になってないと改革が進まないと思われましたので、仕切り直してもう一段取り組みを進めないといけませんし、それを新たに入学してくる人にもしっかりと理解して入ってきていただく、そしてその期待に応えられるだけの新しいカリキュラムと、そこと連動

した部活動の向上もう一度計っていくという循環がしっかり作れるようにしなければならないと思います。先ほどの YouTube の事案にも関わりますが、市尼の案件を見て思いますのは、生徒同士が色々な関係の悪化や行き違い、いじめという形になったり不登校につながったり、色々な事につながるわけですが、競技スポーツの向上を目指す中では、当然成績が振るったり、振るわなくなったり色々なことがある中で人間関係に大きな変化が生じたり、こういうことは無くなりたくない。常に高校3年間の教育活動の中で起きることだと思います。そういうことを前提にした中で、子どもたちが主体的にどういふふうに向き合い、乗り越えていくのかということ私達もスキルアップしていかないとはいけませんので、そういったところで新しいカリキュラムで例えば先輩後輩の間でのコーチングの学びであったり、チームのマネジメントプログラムであったり、少しそういったスポーツ科学的な若しくは自分たちが部活動の実践の中に取り込めるようなカリキュラムをどんどん強化していくべきではないかというふうに思っておりますし、それについて予算もつけたいと思っております。生徒の話し合いだけでは簡単にはいかないこともあるかもしれませんが、そういったことをサポートしていく仕組みをコーディネートすることも含めてですけど、生徒自身ここで学ぶ一人一人の部員が、もう一段自分たちの置かれている状況を俯瞰するようなことにつながるような知識や、授業等も併せて強化していけたらいいのではないかと思います。どちらかだけが100パーセント悪いという訳ではないという案件が多いと思います。どちらもそれぞれの言い分のある訳です。そういうことを踏まえた学び、私達も学び続けますけれども、その学びはやっぱり入学してくれた生徒に還元されないといけません。生徒達自身が苦しみながら体験することがその子の成長につながると思っておりますので、そのためにはどんなカリキュラムにしていくべきなのか部活の在り方はどう在るべきなのかという発想で、こんな簡単にはいきませんし、そういうことはもちろんこれまでの取り組みも盛り込まれてきたと思いますけれども、それでも結果、重大事案が立て続けに発生したということになりましたので、切り替えもしていきながら進めていきたいと思っております。まだ道半ばかなと思っておりますので引き続き取り組んでいきたいところなんです。あと、開かれた学校もさらに進化したということで喜んでおります。高校生はもう十分色々なことを自分たちで学んでいくことが可能だと思いますので、私達も尊重した上でサポートするという取り組みにしていけたらと思います。進路指導も今はいろいろ書いておりますが、体育科の進路どういふふうにしていくのか、推薦で入ってくるわけですね。どういふふうサポートしていくのか。これは何回も言ってきたことですが、ガバナンスを考えていく上では一定の人事異動もやっていくべきだということが、私たちの取り組みの方針としては了承されています。これについては指導が途切れないうにしっかりと保障していくというのが、この間、課題になりまして、反省も踏まえて取り組んでいくべきことですが、引き続きやっていかないとはいけません。組織的にやるという体制にはなったということですよ。最後のページの受験する段階で理解して市尼の門をくぐってもらいたいということでスクールポリシーにつながっていく部分かと思っておりますので、より一層頑張っていかなければならないところだと思っております。市尼はこれまで多くの素晴らしい成績も残してきた、生徒たちに慕われる指導者の方もたくさんいてくださる。だけど、やっぱり変わらないといけない部分があるとしたら、先生方へのサポートのプログラムっていう事もしっかりやってそれが本当にどう変わったのかということが見える化されていかないと、同じような体罰がうやむやにされそうになるというような重大事案が二度と起こらないという

確信につながらないと思います。まだ、決して十分なところには到達したとは思っておりませんし、しっかりと改革を進めていくべきだというお声もたくさん頂戴しているところですので、学校と力をあわせ、教育委員会と力をあわせ頑張っていきたいと思います。第三者委員会からのご指摘を踏まえてですが、これも下地にしながらスクールポリシーが出来てくる。スクールポリシーのチェックとこれが二重の作業にならないようにはしたいと思っています。まだまだ引き続いて皆で見えていかないといけないし、市尼だけが市立高校じゃないので、三校まとめて状況を確認していくことになるかと思っています。

徳山 市尼ですけれども、僕は普段学歴とか人の事は聞かないんですけれども、市尼出身の方が多いなと。尼崎の中心的な高校だなと感じているところです。先ほど、申し上げた通り、風通しが決してよくなかったわけですが、子どもを守るための改革なので、そこを教育委員会も学校現場もしっかり認識したうえで、これからやっていかないといけない、外から見たら、なかなか進まないところもあると思いますが。いろんな意見があるなというの、前の総合教育会議から人の話を聞いてぶれたり、戻ったりしているところはあります。子どもを守ることを要点にした上で校長のガバナンスをしっかりしていただくということと、外からの目を意識した風通しのよさをしっかりやっていくことが何より重要なかなと、そういう観点で意見を述べていきたいと思っております。

中平 市長のコメント、色々考えながら聞かせていただきました。ずっと頭の中で考えていたのは、「教育を評価していく」ってどういう事なのだろうということ。この一年市尼への関わりであったり、起こってきた問題を見てきましたけれど、すごく大きな反省としては、一つは近視眼的な取り組みというのが非常に多かったのではないかということです。一、二年で成果を出していくとか、すぐわかる形での成果を求めるような事があって、それがかえって混乱や問題を生じさせたというようなこともあったのではないかという印象を持っています。そういう事も踏まえて、「教育の評価」っていつ出てくるんだろうと考えていました。先ほど大学への進学状況について、校長先生が一つの成果としておっしゃっていただいたと理解しています。それももちろん、そうですけれども、最終的な成果は、進学者が増えた事なのだろうか、成績が向上したことなのだろうか。視野を広げると、もっと大きな、長いスパンで見ていくこともできるように思いました。このあいだ、校長先生からも教えていただいたんですけど、科学的な賞を獲ったOBの方がいらっしゃって、非常に高齢な方ということでした。「市尼出身です」と喜んでおられました。もしかしたらそんなふう卒業した生徒が、70、80で教育的な評価が見える形で出てくるかもしれない。そんなふう考えると、我々が早々に評価していくだけの物差しじゃないようなものも、学校現場に関わっていく時には必要なのではないかと考えながら聞かせていただきました。学校の人事異動に関しても、指導の体制というようなことを考えると一年のスパンじゃなくて、二年、三年あるいはもっと長いスパンで学校側に提示していくことも必要かもしれないし、いろいろな施策、取り組みの中で、市尼という学校を考えると、すでに100年の歴史があって、それだけの歴史の中で評価の軸が形作られている。市民の誇りであったり、現役生や保護者の皆さんから伺っていますが、OB、OGであるというプライドもおそらく成果になってくるんだろうと思うんですね。そのあたりも含めて、総合的に教育って何だろうという問いを重ねることが必要ではないか。市尼はじめ高校の教育の見直しということについても、私は、悠長な事を言っているように聞こえるかもしれませんが事務局や学校、先生皆さんと市長はじめ市民の皆さんとも大きな視点で一緒に考えていきたい、それが必要なことではないだろうかと思いつつ聞かせてもらいました。

- 太田垣 この体罰の問題を期に、改革をするにあたって教育現場と教育委員会の事務局の意見に齟齬があって、対立のような状況になってしまいました。それが要因で市尼高校の改革が進まなかったと思います。これまでも申し上げてきた通り、対立と言いましても、体罰を無くそうとか、また、生徒さんが学びやすい環境を作ろうという同じところを双方が目指してきたことは確かなことです。私達教育委員は、生徒さんのお話も聞きましたし、そのご父兄の方、市尼高校の各先生方から話を聞いてまいりましたけれども、生徒さんのための良い環境づくりの方法が違っただけで、やはり目標は同じだと思いました。ですので、市教委と教育現場の対話、コミュニケーションの重要性を痛感しております。
- 正岡 私、違う方向からお話させていただけたらと思うんですけども、市立高校三校ともそうなんです、講師の先生方の中で、講師の割合が非常に高いということを昨年4月から教育委員させていただいて資料をみせていただいて、すごく驚きました。その現状をですね、講師の先生が去年の夏の兵庫県の採用試験受けられてたくさん合格されて、でも、尼崎には帰ってこないという事実も伺ったんです。それに対して教育委員会として、あるいは尼崎市として何か打つ手がないのかということも来年度から一緒に考えていただけたらなど、正教諭の割合を増やすためには何が出来るのかっていうのもとても大事なことだと思いますので、一つの議題と言いますか、課題として取り上げていただけたらなどと思うのが一点と、実は今日の会議に向けて以前頂いた資料を予習という意味で見えてきたのですが、そこに市尼の体育科に関しまして、コーチングスタッフですね、市の方から予算つけられて、そういう方が先生と一緒に指導されているんだというのを改めて知りました。その中で気になる文言がございまして、課外クラブ活動技術指導員というのを一人から今後十年前の3人に戻すという一文がございまして、まだ委員会の中では取り上げられてない話題だと思うのですが、予算の関係なのか具体的にこの3人に戻すようにというのを読んでも私は理解出来ないんですけども、先ほどの講師の先生が多くて、職員構成もいびつである、プラス特に市尼の体育科、文化部も含まれておりますけれども、指導の先生方とは別に指導なさっている方に関して、どういうふうになっているのか4月から勉強していきたいと思っております。
- 稲村 教委 これは教育委員会事務局から返答が出来ますか。  
教育委員がおっしゃられた臨時講師の方が試験に通られて、市尼でそのまま正規になれないというのは、県のほうは基本的に臨時講師の先生が正規教諭試験を通られてもその場で臨時講師の配属先そのまま正規教諭として採用することを認めていない。それと臨時講師につきましては、元々県の高教諭になれる母数が少ないのと、試験が厳しいというところもあって、市立高校も含めた需要を県が採用出来てないという現実がございまして。そのあたりで我々も、年度当初、年度途中、当然人事異動の時期にも教育委員が言われたような要望は常にしているんですけども最終的な配置で、県立高校が優先されているというところもございまして。そういったところで、教育委員が言われる臨時講師の数が多いいという事も我々も課題として認識しておりますので、引き続き県教委へ要望することと、我々のほうで何か出来ないかという検討はしておりますので、少しでも正規の数が増やせるようにということについては考えているところでございまして。
- 稲村 教委 具体的にどうということですか。市の予算でなく、県の採用の課題が大きいという返事だと思ったのですが。市の定数の問題じゃないということでしょうか。定数は頂いているんですけど、結局試験を県の方をお願いしていますので、我々の数も含めて県には採用してほしいと言っておりますけど、事実上その数

だけ合格しないということと、合格した中で、県立高校から充てていっているのではなかなか我々の方まで、要望している数が十分にこないということで、不足する部分については臨時講師を充てざるを得ないということが現状でございます。例えば、仮に市が独自で、市費で高校の教諭を採用する事が出来るのであれば、それはそれで正規教諭を埋められるという話にはなりますが、そうしますと市立高校3校だけで。

稲村 人事交流が出来なくなるということですか。

教委 はい、ということがあって今回の体罰の案件にも影響するかと考えております。

稲村 それは、普通の授業ももたれているのですか。

教委 そうですね。

稲村 部活動が、体育科が特色としてありますよね、市尼は。そのことと正規が少ないというのは因果関係がないという理解でいいですか。

高橋 臨時講師も正規教諭も両方、教員というくくりなので部活動も当然授業も持ってもらうんですが、例えば放課後に、臨時講師の方に残って補習してくださいというのは無理に言えない部分があるので、正規教員の方が、何年か継続して働いてもらえるのでその意味で1年から3年までもつとか長期で指導する、正規の先生のほうが子どもにとってはいいのかと思います。確かに臨時講師の中でも一生懸命やっていたく先生もたくさんいるんですけど。

稲村 この間やっぱり市立の中だけだと、異動が狭くてなかなか色々な他校のノウハウを吸収できないとか自分の学校では当たり前のことが、本来は今の県立高校の主流とはかなりズレてるかもしれないという、そういうことに気付く場面が少ないということは指摘を受けているところです。狭い世界で留まってしまうのは非常にリスクがあると思う半面、定数のところに臨時の人が配置されている場合、その臨時の人の処遇をどうするかというのは市の問題なのでしょう。もう少しその処遇を引き上げて、放課後もブラックになりやすいわけですよ。そこの改善の余地はあるということでしょうか。義務教育でも、県の職員になるのでここは難しいと差を感じています。

徳山 そういう問題認識しているんですけど、臨時教員さんの扱いこそが本来の職員の、職員の扱い方という言い方は悪いかもしいんですが、扱いだと思っているので、本当なら人を増やす方がいいのかもしれませんが、部活と授業を切り離して別の人が担当するなどいろんな働き方改革の中の話だと考える。高校の先生を市で配置できなくて県に頼まないといけないというのが色々な問題起こしていると感じる。

稲村 それについては教育委員会の方で現状と課題と、考えられる対策ですよ、いくつか在り得ると思うのですが、教育の方で整理をお願いしてもいいですか。私も当然、大きな方針として必要な予算の確保は頑張りますけど、具体的な処方としては少し県教委等、色々なやり方を、教育委員会のほうで考えていただかないといけないと思いますので、提案をお願いしたいと思います。よろしくお願ひします。

白畑 体罰については二度と起こさないということで取り組んできました。反省としては、改善項目を定めていくことが目的となって、それを追い求め過ぎた、学校とのコミュニケーション不足が生じた反省があります。これから説明するスクールミッションを学校と共有して学校が打ち出すスクールポリシーを学校とともに進めていくことが重要であると考えています。スクールミッション、スクールポリシーを定めて学校とともにこのアクションプランも考えていきたいと思っております。

稲村 ありがとうございます。何度も繰り返しますが、改革はまだまだ取り組み途上

だと思っています。以前のこの会議でも申し上げましたけれども、体育科を廃止せざるを得ないという判断をせざるを得ないような事態をもう引き起こすことは絶対に許されないと考えています。今の市尼だったら、厳しい競技スポーツですから、やっていたら結果的に怪我をすとかそういう事は当然在り得るかもしれませんが、体罰による鼓膜裂傷で夜中に救急車で運ばれるとか、悲しいかな、大阪の桜ノ宮高校みたいに自死に追い込まれるとか、そういった事は決してもうない指導やチーム力を目指していく教育が行われている市尼だと胸を張れる日まで、もう一息頑張っていけないんじゃないかと思っています。これまでの良き伝統の上にも、その良き伝統がうまくいったからこそ変わらない部分があるのだとしたらそこは頑張らないといけないというふうに考えています。言っておきながら、市尼の関係者は多いのは当たり前ですよ、100年の歴史があるんですから。多くの人が市尼を愛し、誇りに思って、私達も元気づけられてこの尼崎のまちづくりがあるわけです。その中で体育科が担ってきた役割というか、活躍はすごく大きいわけです。もちろん、普通科も含めて皆ですけど、生徒達はすごく頑張ってくれて。それを改革が出来ずに廃止しか道がないということは、それは大人の責任でやってはいけないと考えておりますので、今一度皆さんと気持ちをひとつに頑張りたいと思います。それでは、時間もきてしまったので、4つめのスクールミッションの策定について説明をお願いします。

白畑 スクールミッションについては、高校の設置者が各学校の存在意義や社会的役割、目指すべき学校像を再定義して各学校とともにスクールミッションを前提にスクールポリシーを策定するということになっています。スクールミッションを定義しているが、尼崎市として市立高校3校の共通のスクールミッションを「Agency (エージェンシー)」としており、副題が「自ら考え、行動し、未来を拓く人を育てる」としています。このエージェンシーはOECDで公表された概念であり、自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく能力や姿勢これを表す意味です。エージェンシーという言葉は、まだ一般的な言葉ではないがそれを広めていく先導的役割としての意味も込めて取り組んでいきたい。各学校のスクールミッションについては各学校と調整した結果、尼崎高校については次世代を担うリーダーを育成する学校、双星高校については「社会とつながる」専門性を高める学校、琴ノ浦高校については一人一人の夢や目標を実現する学校と決めました。今後、スクールミッションを前提に、教職員、生徒、保護者から意見を聴取し、市教委も一緒になってスクールポリシーを策定していきたいと考えておまして、今後、高校の入学説明会等で公表して入学してくる生徒に説明していきたいと考えています。

稲村 教育長からもありましたけれどもエージェンシーという言葉がまだまだ多くの人には理解されにくい言葉ということを逆手にとっていこうというレクチャーを事前にはいただきました。つまり、何それ？って、エージェントという代理人というようなイメージが強くて、何のこと？となる方のほうが多いのではないかと思います。だからこそ、エージェンシーって何だろう。どうしてこれが尼崎市の市立高校のスクールミッションとして掲げられているのかわからないのを、むしろしっかりと引っかかってもらって、通り一遍の言葉で流されるよりは、引っかかる言葉で呼びかけて一緒に確認が出来たらという作戦だと理解いたしました。このエージェンシーというのはSDGsや様々な国際的な目標が掲げられている中で、教育分野でこれから重視される能力として、言われている事ですので国際的には、取り上げられている言葉ですが、日本ではまだまだという事と、ここで副題として自ら考え、行動し、未来を拓く人を育てる、つまり自分で考え、自分で行動し、他者と共同し社会にコミットする、

そういった力を育んでいくという意味ですけど、ぴったりとくる日本語がないんですよね。シチズンシップっていう言葉もなかなかいい日本語がない。カタカナばかりも良くない、英語ばかりも良くないっていうことですが、これからの国際的な活躍を担っていくであろう世代の人たちに向けて、ふさわしい概念をとということで、エージェンシー、自ら考え、行動し、未来を拓く人を育てるということを通称のスクールミッションとしたと思います。各学校ごとを見ていただきますと、やはり主体性ということですね。受け身に教えられたことを吸収するだけでなく、様々な経験から自ら学んでいく、それを血肉にしていく、そのサポートをしていく教育環境づくりということが、どの3つにも共通して強調されているかなと思いますし、そのためには色々な人たちとの繋がり、多様性が必要だということですね。それはスポーツを通じてということも一つでしょう。いろいろなインターンシップとか、琴ノ浦だったら働きながら学んでいる生徒もいますよね。そういう色々な一つ一つの他者とのつながり、社会とのつながり、全て学びにつながっていくし、不可欠なものであるということも3つの学校に共通のものとして入っているかというふうに受け止めております。この会議をもってこのスクールミッションについては一定確定ということで、それを受けて新年度に各学校がしっかりとスクールポリシーを固めていくということかと理解しておりますので、今日ここで事前に意見交換したものが、ここに反映されて今日最新版で出しているかと思っております。私としましても、このエージェンシーを浸透させていくことはかなりPR力が必要だと思いますので、市のほうでも意識的に言っていこうと思いますが、結局誰もエージェンシーって分からないままっていうことのないように。尼崎の市立高校を卒業した子はエージェンシーという言葉を知らない子はいないというふうにならないと、これをスクールミッションにしたと言えないと思いますので、そのような決意を皆さんと共有をして、これをスクールミッションとさせていただきますがよろしいでしょうか。

中平 作っていく時にも議論していたんですけど、言うまでもなく、主体性って非常に重要なことだと思います。この言葉に込められている意味を大事にさせていただきたいと思います。作っていく過程の中で、学校現場、狭い組織内だけで終わらないようにしていただきたい。さきほど学校現場ではスクールポリシーを作成するというお話がありましたけど、文科省の方針にもこれらを作成する中で、地域とのつながりを意識するような言及があります。作り方について意識しながら学校だけ、あるいは組織内だけでない形で、地域社会も含めた皆で共有していくような作り方をしていく、一方通行ではなく、多様な主体がインタラクティブな形でしていく、その後どうやって広めていくのかというところまでしっかりとビジョンをもって、関わりながら作業を進めていけるようなプランをたてていただきたいと思っております。

それから、もう一つ。学校だけでとじるのは勿体ないなというふうに思っています。総合教育会議ですので、市長・市長部局のみなさんには、「教育委員会でやっている、学校でやっている」ということで眺めていただくのではなくて、ぜひ、ご協力をお願いしたい。市長が今おっしゃっていただいたようにエージェンシーを育てられた、涵養された生徒さん達がいくところがどこかっていうと尼崎市なわけです。地域社会なわけです。ですから、それこそ例えば在学中でも卒業後でも地域課であったりとか尼崎市の行政施策の中で連携しながら、市のブランドとして、尼崎市の教育のバリューを高めていただくような形で連携していただけると、今行っているこの総合教育会議の意味にもなるかと思えます。教育委員会、あるいは学校がスタンドアローンでやるんじゃなくて、連携しながら市長部局にも一緒にしていただくことがすごくいい展開になってい



くんじゃないかなと思いました。今後は、その具体的な形をご相談して進めていただくようお願いできればなと思います。

徳山 この表題を決めるのに何回も議論した。議論は散々したのであとは高校とディスカッションしながら修正していけばいいのではないかと考えています。

太田垣 エージェンシー・・・この意味が示す通りの翻訳はとても難しいです。おっしゃったようにどのように、皆さんに理解をしてもらうよう、これを広めるかというのが、一つの課題になるかと思っています。それとサブタイトルですね、「自ら考え、行動し、、、」こちらは日本ではまだまだこういう文化が根付いていないので、例えば受験のために勉強するとか、怒られるからこれをするというような、そういうすでに出来上がった良いゴールが準備されている中で、このテーマを掲げるのは、形だけになってしまいそうな気がします。このタイトル通りの結果を出すために、これを実行する学校側、生徒さんにもこういうことがエージェンシーなんだよという具体例を示していくことが、非常に大切かなと思います。エージェンシーの意味の難しさとこのサブタイトルのハードルの高さ、まだまだ日本の文化背景における実行は難しいと感じています。

正岡 実は昨日の夜TVで新成人となる現在18歳の人がたくさん出演している番組を見ました。その時に自立というのがどういう意味なんだとうというのが話題になったんですけど、それこそ尼崎市内の高校生も3年生はそこに含まれて、新成人という呼び方がされるようになりますし、しっかり大人になるんだよということを知っていただかないといけない時代になっています。このエージェンシーも含めまして、先生方も生徒達もしっかりと勉強会をしていただきたいなと我々も教育委員会も含めてだと思いますが、太田垣委員が言われたように一体エージェンシーどうしたら身につくのか、この言葉はどういうことを目標にしているんだとか改めて我々も勉強して、若い世代に広めていけたらいいなと思っております。

稲村 事前の時にも少し話題になったかと思うのですが、生徒自身がエージェンシーというのを、自分が身に付けようとしているエージェンシーって何なのか、卒業時にそれが身についたのかっていうプログラムがあるといいのかなと思いますし、これは提案ですけれども、これからスクールポリシーを作っていくにあたって、そこに生徒自身が参画してそのポリシーを血肉にしていく。ポリシーですので朝令暮改でそんなに変わるものではないと思いますけれども、今スクールミッション・スクールポリシーが導入される時の在校生だけではなく、毎年の生徒が改めてそれをしっかりと考えるプログラムがあるといい。願わくば、卒業するときにその土台となるエージェンシーが身についたかな、自分達は3年間でこういう経験が出来たよ、こういう事を身に着けて社会に出てこうだったよという先輩の体験談を新入生が聞く機会があるとか、そういうサイクルをイメージしていかないと短期間なことだけじゃない、という事を思いました。スクールミッション・スクールポリシー・エージェンシーをしっかりと育んでいこう、このチャレンジを具体的な取り組みとして見える化出来たらいいかなと、1年・2年では短いと思いますので、しばらく継続して頑張っていけたらなと改めて思いました。

以上